保存のはなしをしよう。

27 作品の旅支度。

館内での作品の保存に関わることを「静」の状態での仕事とすると、一方で作品が動くときにやるべきことがあります。他館の展覧会などに貸し出しするとき、ご返却いただくとき、他館のあるいは個人のご所蔵作品を拝借するとき、拝借していた作品をお返しするときなどです。今回は、その「お返しするとき」の作業をご紹介しようと思います。

作品が動くということは、人間に例えると旅に出ることとも言えます。旅にもいろいろあって、山登りや探検から、出張や帰省も「旅」です。そして、それぞれに適した装備があります。

作品を動かすときも同じで、館内の展示のために建物内を移動する場合は、ほこりよけの薄い和紙（薄葉紙）をかける程度で済みますが、館外に出る場合には、作品が当館の収蔵庫から他館の温度と湿度が管理された空間へ直接に搬入されるとき、長い距離を数日かけて移動するとき、いくつかの会場を巡回するとき、飛行機による輸送をともなうときなど、それぞれの状況に適した装備、つまり梱包が必要になります。

場合によっては、木箱に断熱材を組みこむなど、大変な支度が必要なときもあります。当然、飛行機の貨物室など、温湿度が大きく変わるところではとくに、慎重に考えなければなりません。しかし、それがどのような場合でも必要なのかと、ときどき考えることがあります。当館の収蔵庫から、すぐにご所蔵者のもとへ輸送できるなら、外装のエアキャップ（いわゆる「ぷちぷち」）を外して、そのままお手元で保存していただけるように考えた方が資料に負担がないと個人的には考えます。

今回、荷造りをしたのは、何年もかけて集められた大事な個人のご所蔵品をお返しするためでした。ひとつひとつの資料に資料保存用の無酸紙でフォルダーを作り、厚みのある資料には「たとう」を作りました。資料に触れる梱包資材には無酸紙だけを使うように心がけます。そして、それらを薄葉紙で包んだ資料より2ミリほど大きく切った厚紙で挟んで、薄葉紙を裂いてしごいてつくった紐でしばります。どうすれば資料に負担がないのだろうと、美術品の梱包をしている作業員や修復家の意見も聞きながら、作品に無理のない方法を30年以上試みています。

拝借している間に、資料から私たちが得られる知識には限りがありません。それは展覧会でご覧になった方も同じでしょう。せめて、どれほど多くのことを資料から、そして、資料を貸してくださった方から教えていただいたか。ご返却するときの荷姿に当館の感謝をこめてお伝えしたいと考えています。

（植野比佐見）

令和５年度地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞しました！

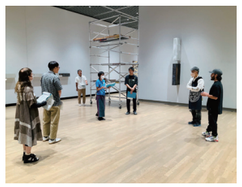
このたび、和歌山県立近代美術館は令和５年度地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞しました。この賞は、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに、特に功績のあった公立文化施設を顕彰するものです。2004（平成16）年度に創設され、今年度が20回目の表彰です。

当館は、「美術館の基本であるコレクション活用の充実を図り、テーマ別展覧会、教職員と連携した「なつやすみの美術館」、小学生向け隔月鑑賞会などを展開。地域文化の普及と誇りの醸成に貢献した」と、これまでの活動を評価いただきました。もちろんこの受賞は、多くの方々からの長年にわたるご支援とご協力があっての賜物です。ここに改めまして、深く感謝申し上げます。今後も一層様々な事業を通じて美術文化の振興に取り組んでまいります。

1月19日に行われた表彰式の様子

展覧会会場（「トランスボーダー」展、2023年）

こども美術館部（小学生向けの鑑賞会）の様子（「疎密考」展、2021年）



作家、教員、学芸員等による和歌山美術館教育研究会の様子（「なつやすみの美術館13」展、2023年）

メールマガジン　Facebook X（旧Twitter）ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。また Facebook や X（旧Twitter）でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアバローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690　担当：中川

和歌山県立近代美術館ニュース　No. 117
編集発行：和歌山県立近代美術館　〒640-8137 和歌山市吹上1-4-14
Tel. 073-436-8690　Fax. 073-436-1337　https://www.momaw.jp/
発行日：2024年1月30日　印刷／デザイン：中和印刷紙器株式会社

和歌山県立近代美術館

MOMA Wakayama news

2024 no117

上山鳥城男《モントレーの入江》1924年　スタンフォード大学 カンターアートセンター蔵
Tokio Ueyama, *Monterey Cove*, 1924, Cantor Arts Center, Stanford University
The Michael Donald Brown Collection, made possible by the William Alden Campbell and Martha Campbell Art Acquisition Fund and the Asian American Art Initiative Acquisitions Fund, 2020.129
「トランスボーダー　和歌山とアメリカをめぐる移民と美術」より

図1　ヘンリー杉本《カーメルハイランド海辺》1937年　和歌山県立近代美術館蔵
© Madeleine Sugimoto

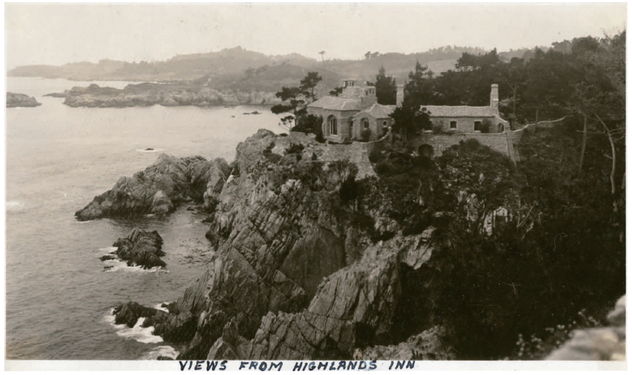


図2「ハイランド・インからの眺め」1920年頃　カリフォルニア州立アーカイブ蔵
(McCarthy Album 04, Photograph 219, California State Archives,
96-07-08-alb04-219)

「トランスボーダー」展補遺
ヘンリー杉本《カーメルハイランド海辺》と上山鳥城男の壁画について

トランスボーダー　和歌山とアメリカをめぐる移民と美術
2023年9月30日–11月30日

この秋開催した「トランスボーダー」展では、アメリカ西海岸に移民を多く輩出した和歌山県の歴史をバックボーンにしながら、同地を中心とした芸術活動を、和歌山ゆかりの芸術家の活動を軸に据えて紹介した。展覧会が対象としたタイムスパンは、明治時代後半から第二次世界大戦終戦までの60年余りで、多くの「移民一世」が生きた時代である。彼らが彼の地で日本人という立場で生きながら生み出した作品だけでなく、その背景と環境をも含めて描き出すことを目指し、当館所蔵作品・資料23点のほか、和歌山県内から85点、県外から25点、そしてアメリカの美術館・博物館や作家の関係者から59点をお借りして、合計200点近い作品・資料を展示することができた。

当館では前身の和歌山県立美術館時代から、石垣栄太郎が活躍したニューヨークを中心としたアメリカ東海岸の美術動向について歴代の学芸員が研究を行い、展覧会を通じて紹介してきた。しかし今回、西海岸の活動に大きく目を向けたこと、また美術の枠に限らない移民史の視点を盛り込めたこと、そしてそれらの調査を日本国内だけでなく、彼らが海を渡った先の地まで出向いて実際に調査できたことはこの展覧会の成果であった。

本展実現のきっかけとなったのは、昨年10月に開催された「第2回和歌山県人会世界大会」で、和歌山県から移民として世界中に出て行った人たちの子孫が里帰りする事業であった。アメリカ、特にロサンゼルスやシアトルなど西海岸には多くの和歌山県人が明治期から渡り、今も各地で県人会が活動している。これに関連して、西海岸の美術活動に注目した展覧会を、ともに展覧会を担当することになる奥村一郎が提案した。この分野の作家について最初に手がかりとしたのは、1995年に開催された展覧会「アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896–1945」（東京都庭園美術館ほか）のカタログで、この中で和歌山県出身の「上山鳥城男（うえやま ときお）」という画家が、戦時中に収容された画家のひとりとして紹介されており、ロサンゼルスを中心とした芸術家グループ「赫土社（しゃくどしゃ）」を率いていたという。そこで奥村は、上山を軸にしつつ、和歌山ゆかりの加地為也（かじ ためや）やヘンリー杉本も含めながら、西海岸における戦前の美術活動を紹介する展覧会ができないかと考えたのである。

展覧会実現にあたっては、別の推進力も働いた。それは文化庁が国内の博物館に対し、海外のミュージアムとの国際交流を促すために募集した委託事業である。この二次募集があることを2022年夏に知り、筆者はこの枠組みで当館ができることを検討した。もし海外館と関わる連携事業を計画するならば、単発で終わるようなイベントではなく、より深く当館の継続的な活動として、その経験が蓄積となる枠組みを作りたい。当館がこれまで行ってきた渡米画家についての収集・研究活動を移民研究という視点から捉え直し、その延長にアメリカのミュージアムとの連携を位置付けてはどうだろう。これならば、当館の研究活動をより良いかたちに広げることにつながるし、何より奥村が提案した展覧会の実現にも大きく近づくことができる。何より2023年に展覧会を実現するタイムリミットも近づいている――そうした構想を抱いて、10月から2月までの限られた期間ではあるものの、「和歌山移民研究を軸とした国際交流事業」として応募し、筆者も本展担当に加わることとなった。

国際連携にあたり、まずは移民というテーマに関して研究・収集を行っている県内2機関として、和歌山大学紀州経済史文化史研究所の東悦子先生と太地町歴史資料室の櫻井敬人学芸員に連携を仰いだ。両機関とは2015年の「特集：アメリカ移民の歴史と芸術家たち」において、美術と移民資料を合わせて展示する試みを、小規模ながら行っていた。今回の展覧会でも、和歌山の移民史に関わる研究を紹介するにはこうした県内館の協力が不可欠であり、さらにはヘンリー杉本の作品・資料を所蔵する和歌山市立博物館や移民資料室を設ける和歌山市民図書館にも協力をお願いした。一方、アメリカの連携館については、以前、石垣栄太郎研究の一環で当館でも講演をしてくださったカリフォルニア大学マーセド校のシープー・ワン（ShiPu Wang）氏に相談し、調査を行いたいと思っていたロサンゼルスの全米日系人博物館（Japanese American National Museum）、通称JANM（ジャノム）のアン・バロウズ（Ann Burroughs）館長を紹介していただいた。ワン氏にはJANMのみならず、多くのアメリカ国内研究者、作家遺族らにお繋ぎいただいたことに、改めて感謝したい。そして幸いにも計画は採択され、日米双方の視点を共有して、調査研究を遂行する体制が整った。ここからは現地調査で明らかになった事柄の一端を報告したい。

図3　現在の様子。木々の間に邸宅が見える（筆者撮影）

図4　高台から見下ろした様子（筆者撮影）

図5　竹久夢二《モントレーの丘から》1931年　竹久夢二美術館蔵

図6　上山鳥城男《疎開者》1942年　全米日系人博物館蔵
Gift of Kayoko Tsukada, 92.20.3

現地での調査は、これまで慣れ親しんでいたつもりの作家や作品についても新たな視点を与えてくれる。当時の芸術家たちがどこを歩き、どのような景色を見て、何を感じ取ったのかを肌身を持って知ることは、作品や作家の理解にかけがえのない一助となる。その例として、当館のコレクション展でも頻繁に展示しているヘンリー杉本の《カーメルハイランド海辺》(1937)**（図1）**を振り返っておこう。これはヘンリーが描いた戦前の風景画のなかでは比較的大型の作品で、そのごつごつとした岩が連なる眺めが、紀伊半島の海岸線を思わせる。画家は何を思ってこの地を描いたのだろうか――実際に描かれた場所を辿ってみることを計画し、太地町の櫻井氏を通じてその地域に住む捕鯨研究者のロバート・ブラウネル（Robert Brownell）氏に連絡を取ってもらった。

事前に作品画像を送ったところ、ブラウネル氏は当時の絵葉書や写真なども参考に、早々とおよその場所を特定し、近辺を車で案内してくださった**（図2）**。画面右下の建物は現存しており、元はアメリカの作家、ダニエル・ルイス・ジェームズが所有していたものだが、訪れた直前に俳優のブラッド・ピットが購入したことでも話題になっていた。ヘンリーが画架を立てたであろうアングルは、木がかなり生い茂って見通しが悪かったため**（図3）**、高台のレストランの窓から全体を見渡してみたところ、岩の上に生えていた木々は枯れてしまっていたが、85年前と変わらずゴツゴツした岩が連なる様子を確認できた**（図4）**。そして周囲を巡ってみると、画面奥に霞む岬は、和歌山や千葉からの移民たちが最初に漁業を始め、大きなアワビをたくさん獲ったポイント・ロボスと呼ばれる場所であることもわかった。

その後、ヘンリーの直筆草稿「My Life Story 自叙伝」(1978)をJANMで調査したところ、「カーメルに寫生の記」という項目の中に、この場所と当館の作品について触れている箇所を見つけた。「白い海辺の砂［、］緑色のサイプラスツリーが海風に吹かれて曲りまがつたその形は日本の海ひんの松を想像さす程興味をそゝつた」という。またこの地で以前アワビの缶詰工場を営んでいた「小谷」氏が、ここを訪れる多くの日本人画家に宿泊場所を提供しており、ヘンリーもまた泊めてもらったと記されていた。小谷氏とは千葉県出身の小谷源之助（こだにげんのすけ）という人物で、『在米日本人史』(1940)にも名を残す最初期の漁業移民であったのだが、ヘンリーが描いたのは和歌山、特に太地を中心とした漁業移民たちが小谷とともに最初にアワビ漁という生業を得た、和歌山移民の歴史にとっても重要な場所だったのである。加えて竹久夢二もこの地と小谷を訪ねており、その時の一枚にはヘンリーの遠景によく似た灰色の岬が描かれている**（図5）**。またヘンリーがこの滞在時に描いたうちの1点「ハイランド風景」が1937年の第2回全米絵画展覧会（Second National Exhibition of American Art）に選出され、それが当館に所蔵されていること、そしてカーメルの海岸風景は、ヨセミテと並んでアメリカで一番の場所だとも記されていた。こうした本人による回想と、数日前に自分が現地を訪れた体験によって、見慣れたはずの画面は、全く新たな意味をもって立ち上がってくることになった。

現地調査の最大の目的でもあったのは、上山鳥城男という画家について、その調査研究自体に新たに着手することだった。上山はヘンリーの描いたカーメルのすぐ近く、モントレーの海岸風景も描いている**（表紙）**。それは近年、アジア美術の著名なコレクションから、スタンフォード大学カン

図7　強制転住に際し、西本願寺の前でバスに乗せられる日系人たち。1942年。ジャック・イワタ撮影。全米日系人博物館蔵 Gift of Jack and Peggy Iwata, 93.102.102

図8　左側が旧JANM。右に現在の JANM があり、向かい合っている（筆者撮影）

図9　現在の文化堂。ガラス下部に記念プレートが設置された（筆者撮影）

ターアートセンターの所蔵にもなっていた。しかし上山の名は、和歌山ゆかりの作家を広く拾い上げて来た当館の資料には、一度も登場していない。のちに分かったことだが、1889年、有田郡鳥屋城村（現在の有田川町）に生まれた上山は、耐久舎（現在の耐久高校）を中退して1908年に単身渡米し、その後、帰国したのは1936年の一度きり、日本の美術界での活動が皆無であったため、従来の国内資料調査ではその存在を知る術がなかったのである。

先述の展覧会に出品された上山の作品 **（図6）** は JANM の所蔵であり、バロウズ館長にはこの作家について調査したいことを伝えたところ、我々との連携事業の担当者として、コレクション管理ディレクターのクリステン・ハヤシ（Kristen Hayashi）氏を指名してくださった。ハヤシ氏はこちらが希望する調査や依頼にその後もずっと根気よく付き合ってくださった上、展覧会の借用作品に関するさまざまな調整でも助けていただいた。

JANM は日系人の体験とその歴史を保存・継承するため、1992年にダウンタウン・ロサンゼルスの北東、リトルトーキョーと呼ばれるエリアに開館した博物館である。この一角には戦前、多くの日本人・日系人がひしめき合うように住んでいたが、太平洋戦争の勃発によって西海岸に住んでいた全ての日本人・日系人が強制的に転住させられることになると、同地の西本願寺前から大勢の人がバスに乗せられ、収容キャンプへと連れて行かれた歴史がある。当時の写真 **（図7）** に映り込む角の丸い建物が1925年に建てられた西本願寺で、JANM ははじめこの建物を転用して開館し、1999年にはその向かいに建てられた現在の建築へと移った **（図8）**。ちなみにその建築を設計したのは、本展でも紹介した小圃千浦の息子、小圃暁で、彼の妹はヘンリーがカーメルで世話になった小谷源之助の息子ユージンと結婚したという繋がりも興味深い。

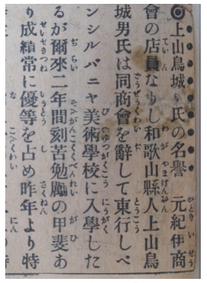
上山に関する作品や資料は JANM のほか、その斜め向かいに位置する「文化堂 Bunkado」というギフトショップにも残されていた **（図9）**。この店は戦後、収容キャンプから引き上げてきた鳥城男とその妻・末が開いたもので、現在は上山の姪であるアイリーン・ツカダ・シモニアン（Irene Tsukada Simonian）氏が引き継いでいる。ここには上山の描いた作品のほか、新聞のスクラップや日記、写真など、上山が残した細かな資料が残されているが、なによりこの商店が立つ場所は、リトルトーキョーが日本人街として栄えるきっかけとなった最初の食堂「かめレストラン」の跡地であり、近年、ロサンゼルス市とリトルトーキョー歴史協会がその記念プレートを設置するなど、名実ともにリトルトーキョーの歴史的遺産となっている。

文化堂を訪れてみると、数多くの未解読資料が残されていた。特に戦前のアメリカでは日系人向けに数多くの邦字新聞が発行されていたこともあって、スクラップブックには日本語と英語の記事がさまざま混在して貼られていたが、日本語の部分はこれまで、ほぼ調査されていないとすぐにわかった。また記事内容から推察するに、日本、特に和歌山で発行された新聞記事も一部には含まれており、同定はこれからの課題であるものの、貴重な資料であることは間違いなかった。これらパズルのピースのような情報の断片を、一つひとつ、また部分部分で繋いでいきながら、その他の資料とあわせて紐解いていくことで、上山の足取りがだんだんと浮かび上がってくることになった。

興味深いのは、このリトルトーキョーと上山の関わりである。1914年にロサンゼルスの南カリフォルニア大学で美術の学位を修めた上山は、ある記事によると、リトルトーキョーにあった紀伊商会という雑貨店に勤めていた **（図10）**。この商店名は、上山が中心になって興した芸術家グループ「赫土社」の第1回展目録にも広告として登場する **（図11）**。さらに調べてみると、紀伊商会は所有者が急逝したため、和歌山県金屋町（現在の有田川町）出身の鳴海重太郎という人物が引き継いでいる（『日米新聞』1916年2月5日5面）。鳴海は1904年に渡米し、アラメダで農園を経営したのち、1912年にロサンゼルスに移ってからは、ロサンゼルスの日本人会や県人会の役員を務めていた。ならば同郷の若者である上山を鳴海が世話したことは容易に想像できる。また上山は1917年から再び絵画を学ぶためペンシルベニアの美術アカデミーに進むが、その間ロサンゼルスにおける上山の連絡先として記されていたのは紀伊商会の住所でもあった上、鳴海家は、上山末の妹である米子が先に嫁いでもおり、1927年に婚約する鳥城男と末の仲は、こうした縁が結んだものだったのではないか。ならば戦後、夫妻が開いた文化堂は、この商店の形態がモデルとなったのかもしれない。最終的にはこの目録に掲載されている広告のほぼ全てが、リトルトーキョーで直接上山らと関わりのあった商店や人物であるという事実も、さまざまな事柄を調べた後に見えてきたことだった。

スクラップブックに貼られた記事の多くは発行年月日が欠けていたため、複数の手がかりを総合して、ようやく明らかになったことも多い。そのひとつが、上山が「ポートランド市の白人キヤソリク教會より大壁畫揮毫の依頼を受け」たと報じる記事で **（図12）**、「巾五尺［1.5 m］高さ貳拾貳尺［6.6 m］の大作九枚で、聖母を中心として聖書から畫材を採る」とある。きっかけとなったのは、どうやら前年にオレゴン州立大学で開いた作品展で、別の英字新聞記事などから情報を繋いでいくと、ペンシルベニアの美術アカデミー同窓だったノーランド・B・ゼーン（Norland B. Zane）がこうした事業に関わっていることがわかった。また日本の官展に送った作品が災禍によって失われてしまったとあることから、上山が1923年の帝展に出品しようとしていたこと、そして記事の発行年や壁画の制作時期がようやくわかってきた。

しかしこの壁画が一体どのようなものなのか、完成したのかも不明であったため、教会壁画の仕事を受けたという一文のみを年譜には記しておいたのだが、展覧会も近くなってスクラップブックの写真を見返していると、



◎上山鳥城男氏の名譽　元紀伊商會の店員なりし和歌山縣人上山鳥城男氏は同商會を辭して東行しペンシルバニヤ美術學校に入學したるが爾來二年間刻苦勉勵の甲斐あり成績常に優等を占め昨年より特

図10 ある記事には「元紀伊商会の店員」とある。上山鳥城男スクラップブック（戦前）より

図11『赫土社展覧会目録』広告頁。右上が紀伊商会、左上が宮武東洋の個人広告。右頁左下の「松風堂」は宮武の父が営んだ菓子店。全米日系人博物館蔵 Gift of the Obata Family, 2000.19.12

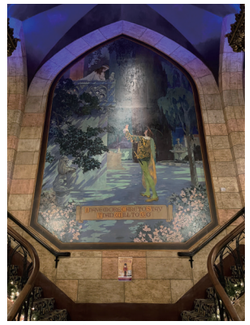
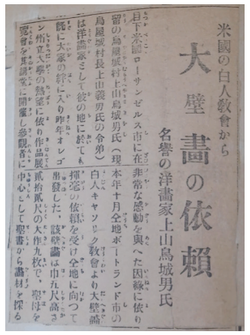


図14 壁画《ロミオとジュリエット》1926年、エルジノール劇場、ポートランド（筆者撮影）

図15 壁画《マクベス》1926年、エルジノール劇場、ポートランド（筆者撮影）



米國の白人教會から
大壁畫の依頼
名譽の洋畫家上山鳥城男氏

基督米國ロサンゼルス市に在り非常な感動を與へた因縁に依り留の鳥屋城村長上山鳥城男氏（現本年十月全地ポートランド市の白人キヤソリク教會より大壁畫揮毫の依頼を受け全地に尚つて

図12「米國の白人教會から」という見出しや故郷の家族に関する記載から、和歌山の新聞であると推測される。上山鳥城男スクラップブック（戦前）より

図13「ロミオとジュリエット」をモチーフに劇場の壁画を描く上山鳥城男。上山鳥城男スクラップブック（戦前）より

図16 上山鳥城男によると思われる祭壇画。ポートランド聖マリア大聖堂、1926年。1996年に改修を手がけた建築事務所に写真をご提供いただいた。Photo courtesy of Hacker Architects, Portland, Oregon, US

薄ぼんやりとした写真にふと目が留まった **（図13）**。そこには白いシャツを着た男性が屈んで絵筆を持ち、大きな画面に向かって何やら人物の足元を描いている。拡大して見てみると、中世かルネサンスのような衣装を身につけている人物が手を挙げながら上を見上げている様子である。これはそのポーズから「ロミオとジュリエット」の場面ではないかと思い、改めて細かに資料を調べ直したところ、新たに記事を発見した。それは教会壁画の下絵が出来上がった1925年の12月、ロサンゼルスに一時戻った際の上山を取材したもので、教会壁画は「何しろ八尺の人物数十人を描」くのだから大仕事であり、さらにはポートランドの「首都セーラムのオレゴン大劇場からも同じく壁画揮毫を依頼されてジユリエツトのバルコニーシーンとマクベスのウイツチを描く事にな」ったと、上山の言葉を伝えていた（『新世界』南加州版1925年12月24日、5面）。慌てて図録の略歴には、教会だけでなく劇場の壁画も手がけた可能性について文言を差し込んだが、実際の壁画が残されているのかどうかまでは確かめることができず、今後の宿題とした。

展覧会の会期中、上山の親族の一人が、一時ポートランドに住んでいたと知り、大きな壁画のある古い教会や劇場に心当たりがないか尋ねてみた。それだけではわからなかったものの、今年、上山の展覧会を予定しているデンバー美術館にもこの情報を繋いでくれたところ、キュレーターのJR・ヘンネマン（JR Hennemann）氏が Google マップを検索して、このロミオとジュリエットの壁画を写した投稿写真を見つけてくれた。それはエルジノール劇場という1926年5月に完成した劇場で、上山の壁画制作はその建設事業の一部だったのだろう。こうして上山の描いた壁画は、少なくともひとつ現存するとわかったのが展覧会半ばの11月。残した宿題への手がかりが、早くも見つかったのだった。

そして会期終了後の12月、作品返却のためアメリカに出向くことになっていたが、せっかくならあの上山の壁画を調査できないかと筆者は考えた。常に開いている劇場ではなかったが、たまたま上演がある日に出向くことができそうだったため、シアトルから車で片道4時間をかけて向かった。開場を待ち、ようやく足を踏み入れたそこには、「ロミオとジュリエット」の大きな画面が上手側の上階客席に向かう階段の上に **（図14）**、そして向かい側、下手階段の壁にはマクベスの一場面、3人の魔女がおどろおどろしく毒釜を煮立たせ、呪いを唱えている第4幕の様子が、想像力豊かに描き出されていた **（図15）**。今回、直接訪れてみて、上山が描いた壁画はフレスコではなく油彩で描かれていたことや、一度水害で大きく傷んだため、修復されていることも判明した。劇場の管理者によれば、マクベスに描かれた魔女の顔が怖すぎると注文者が不満を漏らしたことに画家は怒って筆を措き、完成させずに出ていってしまったともいう。修復記録を含め、今後の調査はさらに必要であるが、まずは劇場壁画の現存を確認できたことを嬉しく思う。

一方、教会については場所がどこかも特定できていなかったが、本稿を準備しているなかで、筆者もインターネットの検索で見つけることになった。ポートランドの聖マリア大聖堂に残されている祭壇画 **（図16）** は、「巾五尺高さ貳拾貳尺の大作九枚」という新聞記事の記述とも合致する。しかしどうやら、これが上山による作品だという情報は、全く記されていないようである。アメリカで活動した和歌山ゆかりの画家、上山鳥城男について、アメリカだけでなく日本側の目から明らかにしていく仕事はまだまだ残されているのだろう。その役目を、故郷の美術館学芸員は負っている。

さてトランスボーダー展は無事に閉幕したが、文化庁事業に関しては別の枠組みで本年度も継続し、関連シンポジウムを実施したり、移民の歴史学習について教育連携を推し進めたりするなど、その輪は広がっている。本展の補遺としては一旦締めくくるが、継続中の活動や調査については、また別の稿で報告することとしたい。

（青木加苗）

図1　中銀カプセルタワービル

2023年8月24日、和歌山県立近代美術館に《中銀カプセル A908》がやってきました。当館と和歌山県立博物館を共に設計した建築家・黒川紀章が1972年に完成させた中銀カプセルタワービル。その140個あったカプセルのうちのひとつです。約10平方メートルのスペースに人間が生活する最小限の機能を詰め込んだカプセルは、コアと呼ばれる鉄骨鉄筋コンクリート造の塔に引っ掛けるように積み上げられ、交換して住み続けることができるという、建築史上、画期的なメタボリズム（新陳代謝）の思想を形にした建築です。しかしカプセルは交換されることがないまま、老朽化に新型コロナウイルスのパンデミックが追い打ちとなり、2022年4月から10月にかけて惜しまれつつ解体されました。そしてオーナーと住人が中心となった「中銀カプセルタワービル保存・再生プロジェクト」によって23個のカプセルが救出され、再生されました。

黒川は自身の建築思想をメタボリズムから「共生」へと展開させました。1994年に黒川が完成させた美術館で、黒川紀章の原点が詰まったカプセルをご覧いただける、あらたな場となっています。現在は寄託を受けて展示していますが、美術館としては黒川が示した時代精神の紹介をながく続けられるよう、収蔵に向け努力します。ひとりでも多くの方に、応援をお願いします。

ここでは、建築家・竹山聖氏が寄せてくださった中銀カプセルのためのエッセイを公開します。　（井上芳子）

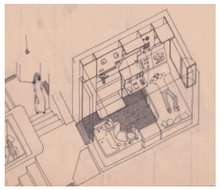


図2　設計時のイメージ

図3　再生中のカプセル

図4　和歌山に到着

1972年のカプセルというミクロコスモス（小宇宙）／時代のタイムマシン

竹山 聖（建築家）

黒川紀章を中心とするグループによって1960年に提案されたメタボリズムは、世界に発信された日本発の建築思想としてもっとも知られたものだ。樹木の幹と果実のように、変わらぬものと生まれ変わるものを対比させ、文字通り新陳代謝（メタボリズム）を謳うその思想は、1970年の大阪万博での実験的な建築に続き、1972年の中銀カプセルタワービルに結実した。

ところが残るものと消え去るものが実際は逆になった。変わらぬものと生まれ変わるものの関係は反転して、変わらぬはずの幹は朽ち、むしろ生まれ変わり続けるはずの果実が時代のタイムマシンとして生き残ることとなった。カプセルである。

面白いことに、黒川紀章はそのことを予感していたように見える。かれがずっと主張してきたのが機械の原理から生命の原理へ、という方向性であり、共生という生命の関係であって、さらにはその底に仏教的な共生（ともいき）という考え方を唱えていたからだ。黒川紀章はそもそも不変の実体を信じていたのでなく、むしろ定かには見えない関係をともなう個と個の共存を夢見ていた。そのように思われる。

そうした共存する個の、1970年代という時代を刻印したありようが、中銀カプセルタワーのカプセルに象徴的に示されている。それは宇宙へと歩を進めつつあった人類の、世界を収蔵するミクロコスモス（小宇宙）の時代表現であった。永遠に生きのびる実体としての幹などははなから信じられていたのでなく、時代を切り取る象徴的な表現としてのカプセルのみが未来への窓としてある。そのように、黒川紀章は意識してか無意識にか、正確に認識していたように思える。

建築は時代を映す鏡である。確かに。そして歴史的に、それは様式として捉えられてきた。しかし、機械のメタフォア、情報のメタフォア、生命のメタフォアが重なり合って建築表現のなかに映し出された20世紀において、実は最も切実な姿で、そして明晰な形で、それが析出されたのは、この黒川紀章のカプセルにおいてではないか。すなわち、20世紀の、とりわけその後半の、建築の究極の姿が、このカプセルに集約されて、ある。

図5　中銀カプセル A908

竹山聖（たけやま せい）

1954年、大阪生まれ。京都大学を卒業し、東京大学大学院に進学。在学中の1979年に設計組織アモルフを創設して設計活動を始める。1992年から2020年まで京都大学で教鞭をとり、現在、京都大学名誉教授、日本建築設計学会会長。代表作として、べにや無何有、強羅花壇、大阪府立北野高校、瑠璃光院白蓮華堂など。近著に『京大建築 学びの革命』（集英社インターナショナル、2022年）、『庭 ／のびやかな建築の思考』（共著、A&F、2020年）など。当館では1996年に友の会協力により開催された「山本容子ウォール・エキシビション［アクセサリー］」の展示構成で穴あきのオレンジ色の和紙をデザインし、山本容子氏との対談会も行われた。また2022年、和歌山市内に A-GIRLS 本社ビルが竣工。

［写真提供および協力］　図1・2：黒川紀章建築都市設計事務所、図3：中銀カプセルタワービル保存・再生プロジェクト、図4：長岡写真事務所

インディアハビタットセンターでの公演後、スタンディングオーベーションの様子

ビハール州パトナ市を彩るミティラー画

MIT アートデザインテクノロジー大学での公演後の記念撮影（撮影：西村仁美）

ビハール博物館会場にて和歌山の展示について報告する筆者（撮影：西村仁美）

「ミティラー美術館コレクション展」後記―Stone Music インドツアー

2022年10月8日から12月25日に当館で開催した「ミティラー美術館コレクション展」。この展覧会は新潟県十日町市にあるミティラー美術館の所蔵するインドのフォークアートを紹介したもので、マハラシュトラ州と和歌山県が友好関係にあることから企画がスタートした。同館館長の長谷川時夫氏（1948–）は1970年代に音楽集団「タージ・マハル旅行団」のメンバーとして活動したことで知られる前衛音楽家でもあり、展覧会の会期中には音楽グループ Stone Music を率いてライブも開催した[*1]。そして、同展担当者のひとりであった私は、展覧会から約1年後、その報告を現地でするべく昨年11月に8日間の Stone Music インドツアーへ同行した。

ミティラー画、ワルリー画といったインドのフォークアートを収集してきた長谷川氏は、「欧米による植民地時代が終わり50年、100年と経っても変わらない流れに疑問を持」ったと言い[*2]、西洋中心の価値基準によらない新しい視点を日本から発信し続けている。本ツアーも、インド国内3ヶ所をめぐって日印の文化交流をさらに一歩推し進めようとする試みであった。

デリーのインディアハビタットセンター（11月23日）、ビハール州パトナのビハール博物館（25日）、マハラシュトラ州プネーの MIT アートデザインテクノロジー大学（27日）の3会場で開催されたこの公演では、長谷川館長によるレクチャーと Stone Music によるライブパフォーマンスが実施された。そして私も、各会場で和歌山での展覧会の出品作についての紹介や展覧会来場者からの反響などを報告した。ライブパフォーマンスは和歌山での顔触れとは一部異なり、長谷川館長を筆頭に、伊勢啓太、金子ユキ、DJ ダンボール、TOMC、永田健太郎、西村仁美、Tatsuro Murakami、むんな、藤原るか、中谷一陽（PA）の11名で構成され、長谷川館長のルバーブ（アフガニスタンの楽器）と歌を中心に、ヴァイオリンやギター、電子機器等を使った即興演奏と、ゴリラを演じたり竹と石を用いたりするパフォーマンスが披露された。

はじめのデリー会場では、初回とあって緊張感が漂っていたが、国際交流基金ニューデリー事務所長の佐藤幸治氏に通訳いただきながらレクチャーを行い、ライブも成功をおさめて、最後は現地の人々からスタンディングオーベーションが送られた。

次の会場となったビハール州は、まさにミティラー画が約三千年にわたり描かれてきた地であり、パトナに降り立った際にも街中で色とりどりのミティラー画が出迎えてくれた。他に類を見ないミティラー画の一大コレクションを築いた長谷川氏は、インド国内にも殆ど保存されていなかったミティラー画の、その恩人として知られており、現地の人々からも熱烈な歓迎を受けた。会場には和歌山での展示の出品作家であったミティラー画の描き手ボーワ・デーヴィー氏も姿を見せ、長谷川氏と旧交を温めておられた。会場となった槇文彦設計による壮麗なビハール博物館は、ミティラー画はもちろん、古代の仏教美術から現代美術に加え、考古学系・自然史系までを扱う巨大な博物館施設であり、その展示空間にも圧倒された。

最終日のマハラシュトラ州では、芸術・デザイン・テクノロジー等のクリエイティブな分野で知られる大学が会場であった。立ち見が出るほど現地の学生たちで会場は賑わい、それぞれレクチャーとライブを楽しんでいた様子だった。公演翌日は大学構内も案内してもらい、音楽の教員から解説を受け、楽器演奏を聴かせてもらったほか、美術学生の教室も訪れ、制作中の油彩画やデッサン、木版画などを拝見した。

今回、長谷川館長から貴重な機会をいただいて、現地の人々と交流しながら、インドの豊かな文化芸術に接することができた。マハラシュトラ州と和歌山県の友好関係をきっかけとして始まった日印の美術交流の可能性についても今後模索していきたい。　（藤本真名美）

＊1　奥村一郎「長谷川時夫トーク＆ライブ「タージ・マハル旅行団からミティラー美術館へ」」『和歌山県立近代美術館ニュース』No.114、2023年3月28日、p.3

＊2　長谷川時夫「ミティラー美術館コレクション展によせて」同上書、p.4